

# 河井道子における女性視点

## 一 色 義 子

### 1. はじめに

キリスト教における女性神学を追求する中で、キリスト教における女性神学に立脚した女性視点とはどういうものか、集約する必要があると思われる。

第1に女性神学は、既往の神学、それがおおむね男性視点によって父権的社会の思考構造において確立され伝承されてきたと見る時、もし、本質的に異なるものがあるとするれば、それはなにか。まず、相異なる点から明らかにする。その上で共通するものは何か、追求したい。それでこそすべての人々にとってのすべての（whole）神学といえよう。

女性神学は上記の神学において成立された論拠の上に議論を構築するためには、その特色とするところは、女性の具体的な「生活の座」に視座を据えて、そこから視点を定めていく。

問題は生活者が女性である場合に自ずとそれは女性の視点によるとはいえない。男性によって構築された社会では女性とはかく思考すべきものであると男性によって造られた社会通念を守ることが女性の美德であると思わされてきた男性による女性視点がある。男性視点に添うように女性を位置づけるとすれば、それは独立した女性視点とはいえない。自立した女性、依存しない女性の女性自身の生活の座から発生した視点、女性による女性自身から生れる視点をまず指摘したい。

今回はその根底になる視座を、恵泉女学園を創設し、キリストを「仲保者」とする友情を重要視した河井道子という一人のキリスト者女性におい

て、眺めていく。ことに、河井道子の出来るだけ初期の言論・記事を通して、彼女の持つ視座を明らかにする。その上で、それが、現代における女性神学視点の起点としてどうかかわるかをあきらかにしたい。

資料として、本稿では、(1)河井道子の書簡—私生活の中で、(2)「明治の女子」の記事—YWCAの中で、(3)月刊雑誌「新女界」の記事—一般社会の女性を視座にした中で、その側面を試みる。

## 2

### 2-(1) 河井道子の書簡—私生活の中で

20世紀の開幕とほとんど時を重ねる1904年、河井道子はアメリカ、プリンマー女子大学を卒業して帰朝、直ちに津田英学塾に奉職した。当時、言文一致運動たけなわであった。国木田独歩、尾崎紅葉、巖谷小波、等の著作が発売され、口語による文章表現がとりあげられてきていた。一般には書簡も、すべての記録は文語体であった。河井道子と同年代にアメリカ留学していた野口英世のアメリカでの書簡は極親しい友人へは、口語体書簡がみられる。ことに男性は妻にあてても候文が通常であった。河井道子も、年長者、公の書簡は一切、文語文、候文であったが、極親しい教え子に対して、口語文がみられる。そして、河井道子の書簡は、そうした親しい者への文体は叙述的で、報告型で、後年の書簡と共通するものがある。電話が一般に普及されていなかった時代の、現在の電話の役目をしたと見られる。即ち実に筆まめに手紙をしたためている。その特徴は、話すような口語文である。特に教え子であり、生涯の同労者、友、となった渡邊百合（のちの一色ゆり）に対しては、かなり初期から途中で英語に移り、日英文や、英日文、英日英文等自在であった。

このような手紙には、それゆえ、当時の女性言葉であった表現もあまりない。youは「貴女」が用いられ、「御許様」のような表現はごく希にあるだけである。

河井道子の現在入手できる最も古い渡邊百合宛の書簡から見ていく。

[書簡 a - 1905年]

書簡 a - 1905 (明治38年 7月19日消印) 河井道子から渡邊ゆり宛の手紙の一部。時に道子, 29才, 百合, 17才。

「私は今鎌倉に居りますが今朝の汽車にて東京に帰ります処です 大乱に任せて御返事を書いて出立致します。ことに封入の手紙は廻文ですから貴女が済みましたら自分でもかいて, 次には誰でも名性(姓著者注)のしるしてある御方に送ってください, 紙は一枚よりゆるされません。

さて私は八月早々御殿場に参ります……。

八田さんも私と一処に参り私の母も参りますからなかなか面白い事と楽しみに致して居ります 是非とまりがけで御遊びに御出で下さい 夜具はないかもしれませんよ 先は急ぎ御返事まで申し上げます 十八日 河井道子 百合子様」(裏表罫線のあるノートの1頁を半折にして用いられている)

ユーモアさえあるさわやかな人間関係がみられる。これが津田英学塾入学1年目の学生への教師の手紙であるとは当時の堅苦しい師弟関係を考えると逸脱し人間関係の温もりを感じさせる。

その一か月後, この招きに対して, 百合は三島から父に伴われて御殿場に滞在の河井の元に挨拶に参上し, 百合だけは泊まった。

以下がそのあとで御殿場になお滞在中の河井から百合への手紙の一部分である。

「正午

今日も又雨降にて貴女の御帰宅になりましたを泣くためかと思はれます…… 葡萄は家中にわけ私は始めてジャムをこしらへて見ました グレイプ・ジャムを御味になりし事が御座いますか……」署名は「ひらめ 八月十七日 たら様」となっており, 裏面には百合子様と記してある。楽しく遊んでおそらく大笑いしたゲームの際の命名のあとと思われる。

教師と学生の身分の厳しかった時代に実に対等なほとんど友達に書くような調子である。人間の立場, 格式とは, 別のものがそこにあり, 自由であり, 豊かなものを感じさせられる。

[書簡 b - 1908年]

書簡 b-1908年（明治41）7月23日 東京千駄ヶ谷896 河井道子

百合受洗の報に接して、「御手紙度々難有御礼申上げ候 就ては此度はいよいよ御地にて御受洗ときき飛び立ばかり嬉しく存じ八月二日は是非参上いたし其時の御様子拝見いたし度と今日よりたのしみにいたし居候 御両親さまにはよくも御許可せらるものと嬉しく感謝の外無く御座候 これよりはますます貴女の責任も重く相成るべくも 神共にまします為に力添へ給ふ事ゆえますます御進み遊され 美しき信者の御生涯を御おくり遊ばされ度候 第一河井と云ふものを忘れて神様を第一に貴女の頭におき上成事何より大せつに御座候 わが願ならで神さまが直接に貴女を招れ給ひしを思ひ上成度し 実に嬉しき此愛何にたとへん様も無く御座候 （中略）

私は何をきて参りましょふ もし洋服とならば貴女の為にきて参りましょふ たとへよいのはありませんでも （後略） （中の宛名は百合子様 道子）」

一人の人格としてもう一人の人格が神と直接結ばれる事を、無上の喜びとした河井の姿勢と熱意が読みとられる。

と同時に、こうした言葉と連続して「私は何を着て参りましょふ」という発想は女性的といえよう。洋服は当時まだ珍しかった。それが、まきおこす反応を考えて、百合の好みを問うている。教師であること、信仰の導き手であったこと、その立場と着るものの意見を持ち出すという、全く違う次元のことが、同居している。河井の自由さ、自然さ、自然な女性性が躊躇なく現れている。

後年も着るものの話はよく出た。贅沢はしていけない、と衣食住に心を用いる事を避けながらも、他者に不快な想いをさせることはよくないという発想から、清潔に、皺ののびたものを、自ら老人めかないようにと最後まで配慮があった。

1909年9月 河井はにわかにはドイツにおけるYWCA大会に出席することになった。道子にとって第2回の海外旅行であった。

出発前の差し迫った日程のなかで、二人は伊豆三津の口野海岸に遊んでいる。河井は浴衣で水泳着をつくることを教え、靴下、スカート付きの水泳着

をつくり、早朝の海に入った。河井が泳ぎを百合に教えると言う事であったが、予期しない深みにはまって溺れかけた百合を道子は必死で抱えるようにして泳ぎ助かった。道子は海に眼鏡をおとして、横浜に逃えにでかけるなど一騒ぎをした。しかし、それも後年は懐かしく、最後の病床にあってもユーモアの好きだった道子は「ぶくぶくの事」と言っただけで思いだし笑いを楽しんだ。

河井は出立した。百合は津田英学塾最後の学年で寮にいた。

### [書簡c - 1909年]

「1909年9月13日、新嘉波（シンガポール）付近14日朝にはシンガポール到着の予定で御座います。皆様には富士見町教会からかえられる様子を想像して居ります……。霊性的にして下さい。よくまあ毎日の手紙がかけたものと驚きました。御親せつ難有度う思ひがけぬ事で……。貴女が私を思ふて下さる心はよくわかってをります……。本当に貴女や外の人々の祈にてかく私が守られめぐまれて居ると常に思ひます。キリストもマリヤ、マルタの同情やペテロ、ヨハネ等の友情を喜び給ひました。況や私の様な弱き者には友情、同情が喜しくないものですか、深く感謝して居ります。併余り思ひすぎなざると失望します。キリストの外に完全なものはありません……。今日イザヤ書を読みまして、適当な句が見あたりましたゆえしるしましよふ四十三・廿五、また私の好む句は四十三・二、それゆえに私はいつも無事又神の力は何でも出来るは四十一・十八、ともかくも四十一章から四十三章迄をつづけて読んで御覧なさい、おどろくべき事が書いてあります……。水の色は殆ど紫色のblueで、白い小波が飛ぶなど活畫です。なかなか揺れだしましたから今夜はこれまで、貴女の祈りも私の祈りも神の前に達してしましよう元気よく再会の日をまち下さい。dear Child good night 九月十二日夜 道子」

河井は手紙の中でも百合に他者に対して友情は神につなげる「仲保者」となれることを喜ぶべきこととすすめており、彼女の発想は常に神が中心であること、その線上で友情を大切にしている。

ここに人格と人格の交わりとしての友情であり、神を中心にした生き方であり、人々を神につなげる使命をもった友情である、ゆえに、道子と百合の

二人の女性の友情が、当時の社会の大方の女性への社会の視点であった男性をよりどころとし、男性からの女性視点という男性主導の規範による生き方でなかった。それゆえに、この友情が生涯つらぬかれたのであった。

## 2-(2) 「明治の女子」の記事—YWCA の中で

### [a. 1905年]

現存するもっとも古い記事は1905年第2巻第7号『米国女学生生活』である。「去る者は日々に疎しとは道理ならむも、其転比例に、去って益々恋しきは御互の学校であらう。既に家庭を造られし諸姉はいざ知らず、然れど社会の厄介者として喋喋論ぜらるる独身者（スピンスター）達には学校生活を追憶して愉快を感じぬ者があらうか。」

「……一として美の調和を損ずるは無いが中にも、別して床しく気高く上品で雅美優麗なのは西に茜さす黄昏に夜服を着けし女学生が此処に二人、彼処に一群と夕風に羽衣の裳を軽く吹かせながら、或は歌ひ或は笑話しつつ一日の苦しき課業を忘れた様に五十万余坪の校園を逍遙する事である……」

ここにはそれを眺めている人の目がある。彼女自身その中にあったが、それは彼女の追憶の中で一服の絵となっている。思想は高く学問に力を尽くす選ばれた女子大学生の気品のある姿となつてうつつている。学問を志した女性の襟持のようなものが感じられる。

河井は30才にしてこの「独身者」の自覚。一人社会人として自立して生きる自覚が感じられる。

### [b. 1908年]

「明治の女子」1908年 第5巻第7号 YWCA 第3回夏期講習の『開会の辞』より

「……学校を出る。境遇が変わる。如何なる時にも望ましく欲しいものは心の友であります。学生時代の友達は沢山にあり、文学や技術の友は有り余る程居りましても是等の友は或る点まで上って参りますると其の間にいつしか大きな門戸が出来高き堤防が横はって参るものでございます。これを取り除くものは一に神の愛であります……。爾は主を紹介しよう。けれども之れ

を自己のものとするのは私共の目、耳、心であります。彼のサマリヤの女のように私共は直接に之を知るといふことが大事であります……一生一度の」生命を「最も有益に最も美しく最も幸福に過ぐさしむるものは救い主たるエスキリストの御力であると信じます。此の意味に於いて主エスキリストを自分の土台とし真の友として祈りかつ勉めて行くのが此の会合の主旨でございます……」

「明治の女子」1912年 第9巻第1号（1911年11月19日青年会館に於ける講演）『汝の若き日に於て救主を知れ』より

「日本の婦人はたして優れりや」との小見出しにおいて述べられているところでは、「……我が婦人界には、まだまだ他国の手本となる程の大きな精神もない、立派な働きもして居らぬ。何か足りないものがある。例へば親の云ふことに叛く事はよくないと云ふ事は知って居る。然し正義を立て通す為には、親の命令にさへも叛いて勝利を得る事が神が人間に命じ給ふ所であると云ふ事は、まだまだ実際の場合行はれて居らぬ。例へば公娼制度のごときも、もし正義の為には親にも屈しないと云ふ念があれば、自然とこの忌はしき制度は亡くなって行くであらう……。日本程朝から晩迄女子に向かって良妻賢母たれと叫んで居る国はない……。良妻賢母は家政学によりてのみは作れぬ、基督教によって高き精神教育が行はれなければならぬと思ふ。」

この良妻賢母論に見られる如く、河井は良妻賢母を二様に用いているのに注意を必要とする。最初の良妻賢母は通常に云われる、良妻賢母、父権的社会に通用する女性忍従の良妻賢母である。しかして、「それで世界に優って良妻賢母を出して居るか」以下は、真実ないみでの、良き妻、賢い母であって、決して儒教的良妻賢母ではない。河井は往々にして、このような言葉に内実の意味変化を与えて、論を展開している。「家政学によりてのみは作れぬ」とは、当時女子の高等教育部門は往々にして、家政学に集中するきらいがあった。それに対して見方によっては実に辛らつである。女性の思想内実を問題としている。

『凡てのよき事は上より来る』のであるが日本には悲しい哉その力の来る源がない。彼れ等外国の婦人は確乎たる信仰を持つが故に大胆であり、主義

の人である。「一人娘に婿八人」といふが、これは日本の女に主義なきが故に、何人をも迎へ、何人にも直ちに厭くと見るによい事実である。」

外国と一概には言えないと現代の私達は見るが、河井の経験の中で抽象される「外国」は、キリスト教界の中でかなり優れた選ばれた人々の中に河井の経験は多かったとみられるし、また、あまりにも日本が諸外国の様相に通じていなかったその格差が大きかったとも思われる。

続いて「純潔である」の項で、「日本では愛といへばすぐに汚い連想を持つ。」に比べて、中国で殉教した宣教師の姉妹がその記念碑の前で結婚式をして、「亡兄亡姉の遺業を継いで神の為に働らかうといふのである。この場合どうして二人が面白半分の気分で居られやうか。実に真剣である。己を捨てて只聖旨のままにと希ふ純潔なものである」と。続いて、「女子の権威を上げてもらはなければならないと思ふならば、先づ神の前に高潔のものとならなければならない。」と展開する。

「基督教は男女により教を区別せぬ」において、現代の女性神学視点と共通するものを見る。それは、論理ではなく、彼女が内実展開をここでも行っているのである。

河井のキリスト教理解に彼女なりの飛躍がある。それは彼女がキリスト教においてすでに現代の女性神学がみるような、その真髓把握を行っているところにある。

「基督教は男女の区別はなく、天の父より見てわが息子、わが息女と云ひ等しく神の愛子である。」

「わが父の完きが如く完くなるべし」と導かれた教へは、実に婦人をして神に似た尊き所迄達せしめんとする誠に無限の権利を与へられたものと云はねばならぬ。」

[c. 1913年]

「女子青年界」1913年 第10巻第7号（全国青年会大会に於ける講演）

「新しきエルサレム」

「……エルサレムといひますのは大きな町、丁度天の神様が新たにお建てになった町、麗しい花嫁、花婿を迎へて下さる、其建物はどうか、其風景は



どうか桜の花がどうであったかといふ様な事ではない、即ち眼目は人間であります、言換えれば最も正義高潔な男女の事で御座います、それが無ければ立派な町は出来ない、基督教は決して確乎した根拠を定めて世に伝播するといふやうな事はできないのでございます。

既に多数の人の居る一の町＝社会であれば必ず男子だけで立つものでは御座いません、又女子だけで出来るものでもございませぬ……キリストの名によりまして私が此処に遣はされましたから、男女異性の考えを捨てまして御互いに兄弟姉妹となって、私の親たり兄たる男子の方に訴へたい……こういふ新しい別天地を造り出すには女子の方からも要求する所があると思ひます……。是が他の社会ならば決して斯ういふ事は言へませぬ……。しかしながら、神が始て人を御造りくださいました時にキリストの仰せ給ふ如く神は男女を御造りなさいました……。皆様は常に男女は車の両輪だとか仰しやいますけれども、実際になりますと、如何にしても女子をばお見下げなさいませぬ……。そこで、私は今女子の方からしても男子の方に御注文を申ても悪い事ではなからふと思ふので御座います……。女だから此位馬鹿にしても宜しいと思つてなさるのかもしれませんが、さういふ事は有るべき事で無いと私は思ふのであります、固より斯ういふ時代で御座いますから毛色の変りました者も出るで御座いませうが是も止むを得ない次第で昔でありましたならば女子などは何も習ふことも無かったのが今日は斯ういふ世の中に出まして色々の本を讀まして高尚な思想にも触れて、正義はかうだ忠義はかうだと倫理の話も伺ひましたから少しでも身に現はしたいと思へば、御転婆だとか出過ぎるとかは言はれます、もとより出過ぎも間違も御座いませう、けれども、何処かに伸びる所を置いて下さいませぬならば、女は正しい方に伸びる事が出来なくて結局何処か間違つた方角に伸びる外はないので御座います、矢張り女も人間でありますから男子の方が立派にお成りなされば女子も成りたいと思ふ、一体いかぬといふときには、何時も女子を引合に出して女は斯うだ、ああだ、誠に立派な批評をして下さいます中にも或時は当たっておりませぬ、どうかチャンとして高い思想を持てる日本婦人は斯うであると言つて貰たいと思ふ事が度々ございませぬ。」

河井は慣例的な言語表現を彼女独特の解釈に還元する特技がある。この新しきエルサレム」もキリスト教を知る者の一般的理解はヨハネ黙示録に示される「新しいエルサレム」であり、終末的完成において、神の支配のゆきわたる新しい都、理想の都である。その解釈は神学上、種々あろうが、その命題をもって、河井は独特の方向で解釈した。「眼目は人間、一言換れば最も正義高潔な男女の事―多数の人の居る一の町＝社会であれば必ず男子だけで立つものではない―また女子だけで出来るものでもない」と進めて、この一文は女性の問題、男性のありかたの問題を論じている。この眼目の展開が河井の内部にしっかり抱いているキリストによる兄弟姉妹である一人一人の現代の表現をすれば、人権を尊重しあう社会の峻厳な理想に裏打ちされている。

齒にもものを着せぬ男性論が続く。「日本の教育は結構なもので御座いますが其は男子の側から見て結構なもので、父親や兄の勝手次第といふような事で女は侮られて居る、斯ういふことで世の中は決して立って行くものではありません、今日の世の中は女といふ者も男子と同じく必要で教育を要するのであります。然るに是迄の有様は前申した通り男子の教育には骨折っても女子の教育は遅れておる、それも男子の為に後れて居るのである……。どうかソドム、ゴモラの如き有様になりたくない、あなた方が彼の基督のエルサレムよエルサレムよ雌の雛を其翼の下に集むる如く我汝の赤子を集めんとせしこと幾回ぞや……其御言葉に対しても男女共に高潔になって、しかして新エルサレムを造り基督教団体の青年男女が高潔な思想を持って互いに助け合っ行く所に必ず新しい別天地が出来ませう、即ち新しいエルサレムが出来るのであります。」

## 2-(3) 月刊雑誌「新女界」の記事―一般社会の女性を視座にして

[a. 1914年]

「新女界」第6巻第十号 1914年 『欧州戦乱より受くる教訓』として多くの女性書いているなかで、河井道子は「私は戦は嫌ひ」と題して記している。「私は絶対に戦は嫌ひで、何誰の前でも非戦を主張するので御座います。」と書き出している。「私は戦時の婦人だからと言って武を奨励したり、

又子供に戦争のまねをさせたり、武器の玩具を与へたりする事は、どうぞ止めたい、子供の時から戦争の悪い事を充分解らせたいと思ひます。」と。

今これを読んでもさしたる不思議ではないかもしれないが、当時の同じ号の他の文章には、「欧州の手本となれ」とか「非常の際は大変敬神の念が強くなり、信仰の念が起こる」等メリットもあるやに記しているのに対して河井のは頭から反戦を述べて一步もゆずらない。そして、女性も戦争に組みしない、日常のあることを積極的に示唆している。曖昧になりがちな女性の態度に喝を入れている。

[b. 1914年]

「新女界」第8巻第十号 1914年 「精神界の経済」

近頃婦人雑誌等には経済と云ふ事がしきりに掲載され如何にすれば家がよく持てるか、買い物が上手に出来るか……色々様々の事を教へられ、若い婦人達は興味をもって讀まれる事と思ひます……斯る事を精神界にあてはめて見ると大いに考ふべき物があると思ひます。」

[c. 1916年]

「新女界」第8巻第十一号 1916年（大正5）「何故に伝道する乎」の中で『真に救はれたる者の幸福』

「……修養を積んだ賢婦人でも宗教心の乏しい人は、失望した人、悲しめる人、淋しい人、苦しんで居る人に対して近く事が非常に難しいと云ふ思ひをさせます、」〈特に婦人が〉の項で「キリスト教の教に従ひ救ひに入らねば到底真個の良妻賢母の実の拳がるものではなく、又良師善友とする事も出来ぬと切に感じます。表面の交際や事業の競争や学問の自慢、着物の展覧会等のやうに、低い位置にぐづぐづしているは、キリストの信仰が真に神を愛し神に従ひ御心の天になる如く地にもならしめ給へと云ふ祈りを実行せんと力めぬからで自ら信仰なき故他に奨励もできぬのであります。伝道は牧師等に頼めばよいと心得自家の召使にさへ神の道を伝へる責任を果たさず、又交際する人々にも宗教の話となると遠慮をする等総て勇気が足らぬから斯る結果を生ずるのであります。婦人の伝道は個人伝道が中心でなければなりません、しかして其効果は大なるものと認めます。」

ここでも「良妻賢母」という発端の表現を前例と同じく用いつつ、「良妻賢母の実」という表現で、その精神的内実、即ち、人間性の問題に触れている。良妻賢母の範囲は、元来、女性の人格性、女性の精神性やキリスト信仰等を考慮にも入れていない語であるが、河井はそれに内実を与えている。これが河井の特色ある日本文化へのアプローチの一姿勢である。

[d. 1917年]

「新女界」第9巻第十二号 1917年（大正6）12月号 「クリスマスの準備」という全体の特集の中で、河井道子は『降誕祭に就いての希望」と題して一文を記している。その中の、〈各家庭に於いて真に意義ある降誕祭をする様に〉との項で、「戦時の際ですから受くるより与ふるは幸なりと云ふ考を持たせたいと思ひます……。又それと同時に信徒の家庭で降誕祭と云ふ事を行ってもらひたいものであります。余り教会に一任しすぎるやうですから最少し各家庭に降誕祭の団らんとして親類を集めるとか子供に喜びを与えるとかしたいもので、余り教会にのみ一任すると大勢を饗応し様とするからどうしても派手になり易いのであります。」〈贈物に就いて〉の項で、「私は贈物全廃は賛成しないほうで与へるといふ精神を子供に養はせるには必要であります。最少し金のかからぬ事で喜びを与えるやうにしたいと思ひます。」と記し、手製のものなど実用になるものを、年中心がけ「旅行等する時は編物等を持って行くとか」ところがけが大切と云っている。また返礼に対して、一円の品物を貰ったから一円を贈らねば、と考えるより「親切な手紙を直ぐお書きなさいと」若い人に云っていると述べている。「贈る者も、貰ふ者も愛を以てすると云ふ風になったらよいと思ひます」と記している。

現代からみるとある程度の常識と感じられる事もあるが、又現在でも潜在的にこうした日常のメンタリテイの中で、家庭の女性たちがとらわれていないとは限らない。

日本の社会文化への批判でもあろう。

### 3. まとめ

総じて、第1に河井道子の視点には、男性を介在させない、男性に依存し

ない一人の自立した人格としての視点がことごとにおいて表れている。これは明治、大正、昭和の前期という父権的家族主義が当然とみなされていた社会慣習に対して、斬新な視点であったといえよう。また一方男装をしたり、あるいは極度に女性らしさを消すように髪をくくり黒等の衣服に身を固めた女史タイプの女性が社会で活動する事業家女性等には見いだされたが、彼女は、なお女性であることを自然にうけとめて、自分の女性の発想も隠していない。独立した人格視点といえる。また、男性との対比を意識しない、男性を介在させない、男性によらない生き方が確立されているといえよう。

第2に、それらを可能にしたのは、河井の神、イエス・キリスト中心で徹底していたことに比重がある生き方であったことに依る。ことに神中心にすべての物事を把握しようとした生き方に表れている。友情も二人の互いの関係のみではなく、相手が神中心に変わる事を無上の喜びとした。私達は神の前にあって不完全であると、互いに自分を含めて、認識し、イエス・キリストによって恵みによって生かされていることへの謙譲さがあった。すべての関係に神が河井の視点から抜けなかった。

第3に、イエスとの関係を「マリヤ、マルタの同情、ペテロ、ヨハネ等の友情」と受けとめるところに、イエス・キリストとの関係が父権的縦関係ではなく、イエスが「あなたがたは私の友である」(ヨハネ福音書15章)と言われたように、友視点をもっていた。それは当時として、驚くべき視点といえよう。ことに、カトリック等において、またプロテスタントにおいても、当時の社会常識との関わりから女性がキリストの花嫁というイメージがわけても強調され、服従と従順が美德とされた中で、この友なるキリストの発想が自然に出てきたところに、彼女の信仰の人格的強力なユニークで自主的、自然な視点があったとみられる。これは現在の女性神学において、確認される女性神学の一視点ということが出来よう。

こうして原資料において、生の河井道子の視点をさぐることで、決して女性神学とはまだ表明されてはいなかったが、河井の視座と視点に、女性神学視点への起点を見る事が出来ると思われる。

そして、この視点を堂々と持っていた故に、日本のキリスト教の思想の中

に、すべての人々にとってのすべての（whole）神学視点を見出すことが出来ると思われる。